大人が絵本を
第15回　絵本論を

司書・読書アドバイザー　安藤　宣子※
小児歯科医師　濱野　良彦※※
※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー　ビブリオキッズ（福岡市）
※※ 医療法人元気が湧く　理事ファウンダー

絵本はメディアなのです

『写真とイラストでたどる子どもの本の歴史』でピーター・ホリンデイルは、「1950年代初めには、テレビを持つ家庭はわずかだった」[1]としながらも、「アメリカのテレビ―来るべき未来の実現」[1]とした50年後の予測図（写真1）が1953年に公表されていたと明らかにしました。テレビがまだ普及していない時代に、将来的にメディアが及ぼす子どもの読書率低下への影響が予測されていたのです。現代のゲームやスマホと人との構図によく似ています。

読書力を阻害する要因といわれるメディアであるゲームやスマホに対して、基本に立ち返り、「絵本とは何か」について、臨床とのかかわりを含めながら考えてみましょう。

絵本については今までいろいろな角度から研究が行われています。児童文学の中のひとつのジャンルとして絵本を論じたリリアンH. スミスの『児童文学論』（1964）は、1949年にドロシー・ホワイトの絵本論が公表されてから15年後に発表された世界2番目の絵本論で、次のように論じています。

> 絵本とは、二つのメディアによってなりたつものである。つまり、ことばと画材である。絵本を一体のものとしてみる時、文と絵とは、これが融合して、絵本に一つの統一と性格を与えるものであるから、おなじ比重をもつことになる[2]。

1964年には、絵本もメディアのひとつという概念が既にあったのです。しかし、それが浸透していくのは40年以上も後のことです。絵本研究の中で「メディア」という表現がされ始めたのは、絵本の世界に美術家が参入してからのことで、1991年に中川素子氏が論じた『絵本はアート』において、「絵本は、わずかなページ数で、心や自然や時間を表現できるすばらしい視覚表現メディアである」[3]と語られました。その後、2000年代の文献になると、絵本は「メディア」との呼称は通念になっています[4~11]。

絵本は、メディアです。スマホやテレビも映像メディアです。でも、絵本は映像メディアと異なり、脳と心と体が能動的に関わることのできる、想像力を豊かにする明確なアナログのメディアなのです。

写真1　「アメリカのテレビ―来るべき未来の実現」（1953年）

『写真とイラストでたどる子どもの本の歴史』
ピーター・ハント 編
さくまゆみこ, 福本友美子, こだまともこ 訳
（柏書房）

絵本を定義してみると！

昨今では、児童文学界だけでなく、多様な専門領域から絵本について論じられるようになりました。そこでよく前提として引用されるのは、バーバラ・ベーダーが『アメリカン・ピクチュア・ブックス』（1978）で論じた絵本の定義です。

> ピクチュアブック（絵本）は、テキストとイラストレーションが、トータルにデザインされたものであ

手にするときは！
真面目に考えると

企画　濱野　良彦
構成　木須　信生※※※
※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー　ビブリオキッズ（福岡市）

り、大量生産の一品目であり、一つの商品である。社会的、文化的、歴史的ドキュメント（記録）であるが、まずなによりも、子どもにとって一つの経験となるものである。

芸術形式としては、絵と言葉が互いに補完し合っていること、向かい合った二つのページが同時に提示されること、そしてページをめくることによってドラマが生みだされることが、絵本の構造を決定づけている。

絵本は、それ自体として、無限の可能性をもつ[12]。

絵本は「文と絵が一体となった芸術」とは、日本における絵本論の先駆者である瀬田貞二氏を始め、誰もが定義づける一般化した概念ですが、絵本が「無限の可能性をもつ」ことを1978年には指摘されていたのです。しかし、その可能性が顕著に浮き彫りにされることは20世紀にはありませんでした。90年代から絵本の研究者が増え、2000年代になると絵本論が高まりを見せ始めたことに合わせて、ブックスタートが始まり、また、絵本研究に美術領域などの専門家が帯同してきたことで、絵本が「無限の可能性」を開花し始めたのではないかと考えています。

バーバラ・ベーダーのこの絵本の定義が発表されるより遡ること約30年前、最初に「絵本とは何か」を唱えたのは、ニュージーランドの図書館員、ドロシー・ホワイトです。ホワイトの絵本論は、瀬田氏が1956年から1973年にかけて、福音館書店発行の「こどものとも」月報に記事を掲載したことで、日本国内で公表されるに至りました。日本において「絵本論」というものが初めて伝えられたのです。

絵本は、子どもが最初にであう本です。長い読書生活を通じてひとの読む本のうちで、いちばん大切な本です。その子が絵本のなかで見つけだす楽しみの量によって、生涯本好きになるかどうかが決まるでしょうから。また、そのときの感銘が、大人になってそのひとの想像力をことあるごとに刺激するでしょう。だから、絵本こそ、力をつくしても、もっとも美しい本にしなければなりません。画家と作家と編集者と―そしておそらく読者とが協力して、年上の人たちの本の千倍も、はなやかに魅力的にしなければなりません。彫刻や映画などと同じく、絵本は一つの美術形式なのです[13]。

絵本は「子どもが最初にであう本」で、「長い読書生活を通じてひとの読む本のうちで、いちばん大切な本」だからこそ、昨今、大量に流通されている「絵本」であれば何でもよいというわけにはいかないと思うのです。当館を利用される保護者の中には、「自分が小さい頃はほとんど絵本を読んでいなかったから、子どもにはたくさんの本に触れさせたい」という願いをもって、来館される方もおられます。子どもの読書に対する保護者の願望と、子ども自身の欲求が重なり合ったとしても、実際に触れる絵本の絵が物語っていなかったり、美しく魅力的な言葉でなかったりしたのでは、想像力を大いに刺激し、子どもに楽しい印象を刻みつけてはくれません。

「画家と作家と編集者」が駆使して創り上げた美しい絵本を、読者となる子どもの周りにいる大人がナビゲーターとなり、その絵本の何千倍もはなやかで魅力的にしなければならないのです。それが保護者の役目であり、あるいは親子をナビゲートできる知識・技術を合わせ持った絵本の専門家のサポートが重要であるということです。

子どもの権利条約と絵本

医療の現場を見てみると、「読書療法」という治療法は古くから存在していたものの、小児医療と絵本の関係は、娯楽や時間待ちの意味合いで待合室に設置、もしくは入院児の遊びや気分転換として病棟で活用されてきました。1994年子どもの権利条約が採択され、子どもの権利に関する意識が高まり始めて、小児医療現場においても絵本に対する認識に変容がみられるようになります。

病児の人権を尊重することから、病児にもその成長発達に応じた方法で入院や検査、処置などの説明を行う「プレパレーションの実践」に向けた取り組みの研究が進められ、導入されてから20年が経ちました。現在では、小児医療の現場で、子どもにとって身近な存在である絵本が、プレパレーションのツールとして活躍の幅を広げています。

医療現場で絵本を活用する動きが活発になればなるほど、その専門家が必要になるということではないでしょうか。医療現場は、栄養士や薬剤師、臨床検査技師、カウンセラーなど、その道の専門家たちが協働して医療を支え、患者のケアに当たっています。子どもの発達に適した絵本、子どもの治療に効果が予測される絵本を取り入れようとするとき、次のコ・メディカルとして絵本司書の存在もまた、縁の下の力となり得るのではないでしょうか。それは単に、絵本に対する知識だけでなく、絵本を読みあう子どもたちのペースで読むという技術的な面も必要となってくるからです。

柳田邦男氏の「大人こそ絵本」運動

絵本とは何かを論じるときのキーワードは、ドロシー・ホワイトが指摘した「画家と作家と編集者と―そして読者とが協力して、本の千倍も、はなやかに魅力的にしなければならない。膝の上で聞き入る子ども、声を出して読む親にも、楽しい印象を刻みつける」[13]という要素にあると思います。このことは、瀬田氏に継ぐ絵本論者である松居直氏もまた、長年にわたり唱え続けています。

> 親と子が共に居て、そのひとときの時間と空間のなかに、絵本という歓びの言葉があり、読み手と聴き手がその言葉の歓びをわかちあい、共有することにあります。絵本はすばらしい言葉と絵で表現されていますが、その言葉も絵も読み手のものとして子どもに語り伝えられ、受けとめられます[14]。

絵本や物語世界が楽しいという経験の根幹は、このように親子で共にいて感情や人間のぬくもりを共有する時間にあるのです。これらを共有した時間が、子どもの感性や想像力といった成長の糧となり、生きる力となり得るのです。

幼児心理学の領域から長年、絵本と子どもの関係を研究し続けている佐々木宏子氏も、「子どもが絵本を読んでもらって楽しむためには、何よりも読み手のおとなとの間に基本的な信頼関係ができあがっていなければならない。笑顔をとおしての交流、肌の触れ合いをとおしての交流、意味はわからなくてもやさしい人の声への集中は、いずれも子どもが絵本を楽しむための前提条件」[15]と言い、心理学研究の領域でも絵本を介した「信頼関係」、「交流」というキーワードにより、「共有」の大切さが論じられているのです。

柳田邦男氏は『大人が絵本に涙する時』(2006)において、「大人こそ絵本を」と世に呼びかけています。「絵本は子どもたちが第一の対象であっても、実は読む人の人生経験が豊かになるにつれ、内容を深

『大人が絵本に涙する時』
柳田邦男 著
(平凡社)

ビブリオベイビー
Bibli Baby

連絡先　福岡市南区大橋 3-2-1 2F
絵本と図鑑の親子ライブラリー　ビブリオキッズ
TEL 092-557-3272　URL http://bibliokids.jp

E-mail
安藤：bibliokids.baby1@gmail.com
濱野：hamano@genkigawaku.com
木須：nobuokisu@gmail.com

く味わえるようになる、すばらしいメディアである」[16]と述べています。大人の皆さん、どうぞ、ご自身のために絵本を読んでください。

小児歯科医療における絵本とは何か

こうしてみてみると、この理論を小児歯科の医療現場に大いに活用できるのではないでしょうか。特に、小児歯科の現場では、診療を受ける小児と、診療・ケアに当たる歯科医師、デンタル・コメディカルスタッフとの間に、「信頼関係」「交流」が結ばれていれば、小児やその保護者の安心感も高まることは、取り上げて言うまでもありません。

「歯科診療」という、大人でもマイナスイメージの強い行為を受ける小さな子どもたちは、器械も、診療行為に当たる大人たちも脅威に感じていることでしょう。では、その間に信頼関係があったとしたら、交流があったとしたら、診療や治療に対する受け止め方も変わってくるのではないでしょうか。

診療前に、患者さんと診療行為以外の時間を取るのは困難なことでしょう。しかし、一冊3分でも、絵本を介在にして、空間や感情を「共有」し、患者さんと医療者が「笑顔をとおしての交流、肌の触れ合いをとおしての交流」を行うことは、小さな「信頼関係」に基づく医療の実践に結びつけることができると信じています。

「児童文化学」の視点に立って絵本の学際的研究の構築に挑んでいる永田桂子氏は、「絵本は、子どもといっしょに読んでいて、同じ場面や文章に思わず笑って共感の心が生まれることがあります。心を通わせる、これこそ絵本の醍醐味です。」[17]と明言しています。この言葉こそ、医療と絵本を、そして患者さんと医療者の心を結び付ける実践につながる心強い言葉です。

そして、それを信じているからこそ、私たちは、これから実践的研究を積み重ねて、ひとつの成果として提案したいと考えています。今回は、私たちの目指すひとつの小児歯科医療のモデルを紹介しましたが、今後は成果として報告させていただきたいと思います。

「大人こそ絵本を」
ありがとうございました。

文　献

1）ピーター・ホリンデイル，ジーナ・サザランド：国際化とファンタジーとリズム，ピーター・ハント編，さくまゆみこ，福本友美子，こだまともこ訳：写真とイラストでたどる子どもの本の歴史，柏書房, 2001, pp.314-317
2）リリアン H. スミス 著，石井桃子，瀬田貞二，渡辺茂男 訳：児童文学論，岩波書店, 1964, pp.203-233
3）中川素子：絵本はアート―ひらかれた絵本論をめざして，教育出版センター, 1991, p.91
4）鳥越信 編：はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅲ―戦後絵本の歩みと展望，ミネルヴァ書房, 2002, pp.380-383
5）今井良朗：絵本とイラストレーション―見えることば，見えないことば，柏書房, 2002, pp.1-3, 88-94
6）谷本誠剛，灰島かり：絵本をひらく―現代絵本の研究，人文書院, 2006, pp.1-4
7）落合恵子：絵本処方箋，朝日新聞出版, 2010, pp.227-229
8）香曽我部秀幸，鈴木穂波：絵本を読むこと―「絵本学」入門，翰林書房, 2012, pp.10-16
9）永田桂子：絵本という文化財に内在する機能，風間書房, 2013, pp.1-10
10）福岡貞子，他：多文化絵本を楽しむ，ミネルヴァ書房, 2014, pp.115-116
11）舟橋斉：絵本の風がふくとき―子どもが絵本色に染まる，かもがわ出版, 2014, pp.15-18
12）吉田新一：絵本／物語るイラストレーション，日本エディタースクール出版部, 1999, pp.9-16
13）瀬田貞二：絵本論―子どもの本評論集，福音館書店, 1985, pp.309-527
14）松居直：絵本のよろこび，日本放送出版協会, 2003, pp.4-21
15）佐々木宏子：新版 絵本と子どものこころ, JULA 出版局, 1993, pp.13-39
16）柳田邦男：大人が絵本に涙する時，平凡社, 2006, p217
17）永田桂子：よい「絵本」とはどんなもの？，チャイルド本社, 2007, pp.9-16